

# 政治変革と自己変革

## 農村共同体と都市生産機構

高島 洋

秋山三喜雄氏の「ユートピア」をはじめ、これまでアーキストのえがいてきた共同体は、そのほとんどが農村共同体のイメージである。もちろん、農村共同体をいかに建設し、運営するかの創造はたしかに大切なことであるし、直接支配権力との闘いはかりでなく、われわれの創造実践の場として能動的に取り組むべきことに異存はない。

しかしながら、戦後の都市における生産機構の膨大化は（必ずしも都市ばかりでないが）その近代化とともに人間生活のあらゆる面に大きな影響を及ぼしつつある。従って革命のビジョンとしては農村共同体のみでは不充分であり、当然、都市における生産機構の組織と運営についても、その改造を探究されなければならないだろう。

そして農村共同体の場合はその萌芽の時期においては、支配権力の側も見守る程度に止め、政策的にも直ちに弾圧することを差控えるであろう。しかし、都市生産機構の場合は、すでに支配権力の管理体制下にあるのだから、反体制側の変革闘争は日々つばぜりあいの攻防ととならざるをえないというのが特徴であろう。

## 二重の永久革命

ところで秋山氏はユートピアのありかたを「私有財産制のない友愛に満ちた社会」としながらも、その運動路線においては、民族主義にやや妥協的であり、現行の選挙制度に参加してもっとも政策的に近い政党を支持するという。私が危惧を抱くのは、こうした路線でゆく時、自己の主体を喪失せぬまでも、時として大衆追隨に陥入せざるを得ない場合も生じてくるのではないかということである。従って秋山氏が対立的に見る革新政党が戦後の運動路線としてたどってきた大衆追隨政策（労働者万能）と結果においてどれ程の差があるだろうか。革新政党は階級闘争を呼号しているも、現実的には硬軟両様の戦略的政治闘争に力点を注いできた。しかもそのような闘争方式が戦後20年を経過して、大衆の内部変革をなし得ず、大衆の思想解放をなしえなかったことを立証したのである。秋山氏の路線もその大衆追隨性がある程度共同体の形成に成功し得て

も大衆の内部変革をなしうるまでに至らないのではないかという疑問が私にはある。

しかし、戦後のこのような批判点は、われわれ連盟についても指摘しうるようだし、かく言う私自身己に向ってつき刺さねばならぬ自己批判の双なるのである。例えば、本紙第97号の主張欄での秋山清氏の「ただ實質的に労働者というものに期待する何ものかがあった」という一文や、同じく第106号向井氏の平和運動の視点を改めよという一文の中の「庶民の平和への心情、これだけでは運動の味方でも土台でもない、むしろ全く対立する異質の敵というべきものである」という20年にわたる平和運動の到達点としての言葉、また加藤茂氏の労働者万能をいませめた一連の文章がその間の経緯をよく理わしている。

では大衆追隨路線に対立する運動路線とはいかなるものであろうか。淺薄なる私の思考をかえりみ推察して私なりに発言するならば、一つには外部の敵として支配権力との対決であろう。もう一つは大衆の中の庶民性との闘いであるが、これについては究極において自己内部に巣くう庶民性との対決とならざるをえない。このような支配権力と自己の内部に対するあくなき対決を私は二重の永久革命とみる。しかも、自己の内部の庶民性との闘いは、ひとりの労働者が自らの内部思想を自らの力で解放しようとするものであり、サンジカリズムでいうところの「労働者の解放は労働者自らの手で」という言葉が、必ずしも政治依存をいませめているばかりでなく、思想の自己変革を意味するものであると私は理解している。

自由連合 第108号 1965年4月

# 空想的社会主義の復権

釈山三喜雄

## 一、空想的社会主義と

### 科学的社会主義の対立解消

マルクス・エンゲルス共著の「共産党宣言」発表以来、空想的社会主義へ向けられたいわれなき科学的社会主義の傲慢無礼の態度と不当なる蔑視・浅薄なる世人の科学的社会主義への付和雷同ぶりも、歴史発展の厳しい現実露呈により、その対立の無意味がようやく世人に気付かれはじめたものの如くである。つまり社会主義は、長い時間の空費の挙句、ここにその新しい出発を余儀されるに至ったものと思われる。

科学は知性の所産である。その科学に依って見直された社会主義を科学的社会主義と称するのであれば、それはもはや社会主義ではない。空想的社会主義は構想力の所産である。諸々の願望・社会理想の現実化・そのやむにきまれぬ希求、それが初発形態の社会主義のあるユートピアの創作となった。人間意識の基盤である意欲がその基調をなしている。言い換えれば、科学的社会主義以外のそれは幸福を追求するという主意主義に依って支えられている。

1917年のソ連邦の革命以来、マルクスあるいはレーニンの名を負う世界の諸革命は、科学的決定論の明白なる敗北の証左でしかないではないか。生産力発展の段階に即応する社会構造の出現という必然説の崩壊、資本家階級という一握りの集団以外の人群の絶対窮乏化論の消滅等等、科学的予想の數には陸続その空しさを暴露した。そして結果として残されたものは、すべてこれ意志活動そのものの成果であることをしめした。主知主義者は主意論者にその席を譲ったのである。

要するに、社会の変革は社会主義の本流たる主意論者の勝利に帰したのである。

ただし、社会主義には一派しかないわけではない。空想的社会主義の段階

においてすでにそうであった如く、権力なき社会は考えられないという一派と、それのない自由社会を希求する他の一派との対立は、いよいよこれからの問題として残されている。空想的社会主義の復讐は成ったが、国家主義と無政府主義は本来の土俵に戻されたのである。

## 二、権力なき社会の創造は

如何にして可能であるか

過去のアナキストは、その勇敢の行動によって、権力行使者を追放することによって可能であるとした。そして国家暴力にはアナキストの暴力を以て報ゆべしとした。支配者の暗殺が世界を震撼させた。いくら殺しても支配者は絶えはしなかった。アナルコ・サンジカリストは、マルクス主義者と同じく、労働階級と握手することで生産を麻痺させることで支配を放逐できるとした。しかし、これも無効であるとしらされた。これら直接の暴力行使、あるいは民衆の蜂起を促すことで自由の王国に到達できるという信念は結局画餅に帰した。残された途は、暴力を放棄し、平和理に、理想社会のモデルを建設し、それが伝播にまわって世界を理想化しようとする企図である。ユートピア、共同体建設運動はかくして発足した。これは新しい思いつきではない。少数の平和的アナキストはまさにこの途を選んだ。トルストイの徒はこの途を歩いた。トルストイアンはキリスト教と同行した。だが、クロボトキンに従うもので、暴力を捨てたものたちがこの途にたどりついた。遠道にみえながら、この途のほかに真に自由を築き上げる方途はないと私は考えている。自らが権力者となることを避け得、同胞を自らと同じく自由に置くには他に途はないと思われる。遅々として、いかにも地味な途であるが、これだけが確実性を持っている。われわれに希望を与えるものは、マルチン・ブーバーが称えたキブツのあるものが歩いた途だ。

## 三、幸福社会の諸条件

封建社会から自由主義=資本主義へ踏みこんだとき、われわれ日本人は、たしかに一時は良き幸福の社会にめぐり合ったと感じたようだ。だが、それは長続きしなかった。武家階級の圧制の時代よりはましな世の中になったよ

うな気がされたにち<sup>が</sup>ぎい<sup>が</sup>なかつた。追々その正体があからさまになるにつれて、一部金満家の気づい気ままだけが、この世をわがもの顔にのさばりまわっているのを見出した。なる程、直接に生命にせまる危険は遠のいた。だが、商人が武士に代ったにすぎないこと、生命へのなし崩しの危険は必ずしも跡を断つたものではなかつた。マルクスのいったら「下品の唯物論」が、庶民の呼吸さえ不可能にするほどの重さでのしかかつてきたのであつた。

抑々、資本主義とは商業主義にはかならないものである。商業は都会が温床であることにより、都会が権力の台座であることと深い係わりを有っている。都会は田舎の搾取に因って存在なし得たものであり、文明とは都会的生活の別語であるから、農山漁村の生き血をすすするヨウカイの正体は文明なのである。都会は定着民なしでは生まれ得ない文化形態であることは見え易いところ。植物の葉茎・果根を採取し、食料となる動物を狩猟する原始民衆や、遊牧民の創り得るものではない。農業民衆の出現だけがこれを可能にさせる条件であろう。

しかし、農民だけが群集しても、その數に自ら耕作地の制限があるから、彼らが直ちに都会を創るには到らなかつたであろう。暴力的支配者の座が都会となつたことは疑いないが、古歴史の支配権の轉移が僧から武家へ為された多くの事実と、先史時代の史跡が、神殿を囲む都市住民の生活を物語っていることと考え合わせるとき、神こそ 都会文化の中核だつたのではなかつたかと思つたものがある。あらゆる人間の不幸の淵源は実に文明に胚胎したに相違ない。

幸福を約束する人間の生活は農業を基盤とし、人間に不可欠の物資を生産する、公害を出さぬ工業と結合した、小さな社会であろう。

人間は社会なしで生き得る動物ではない。社会は不可欠であるが、都市集団や国家的集団は幸福を教す悪しき文化であることに眼覚めねばならない。この悪文化、人類に対するガンにすぎない文明は、人類史200万年のうちの最も新しい1万年前ごろから始まつたものの如くである。マルクスの唯物論は、これらの悪文化の必然的發展を説く。唯物論は下品であれ、高尚であれ、それは、人類生命の尊重に根を置くものでなく、逆に人間の文明への危座を強いる悪魔の呪文である。資本家の飽くことを知らぬ利潤の追求といい、

農民や労働者、幼稚なる学生を<sup>大衆</sup>動して、一党独裁の<sup>Aから下</sup>に整列させピラミットの頂上から、幾百万・幾千万幾億の民衆に号令一下し以て解放への前段階をしいる体制を成就することに狂奔する共産主義は、すべてこれ文明の歌者にすぎない。

自分の幸福は、自分だけがこれを築き得ることを悟れば、直接民主主義の行なわれる農工業に立つアウタルキの体制を創立しなければならぬことに思い到るはずである。かかる小社会を細胞とし、その自由適合が世界を覆うに至る体制のなかに、永久平和の確立はなく、幸福の保証はないのである。各人の自由が、他の自由を侵すことなき限界まで伸長することが認められ、完き平等の発言権が保証され、生産は能力に従って行なわれ、必要に応じて消費するという本来の共産制が可能となろう。世にいう共産主義は決してこのような制度を通ずるものではなく、それは公産制にすぎない。中央政府があって、生産を計画し、その果実を人数に応じて分割しこれを各人に分与するくらいが精一杯のところなのである。ここに自由や平等を求めるなどは野暮の骨頂というもの。水素爆弾開発の父サハロウ博士、ノーベル文学賞の受賞者ソルジニツインの死の苦惱はここに由来するのである。

幸福社会は道徳が規制する。勿論上から下への道徳などという、似而非ものではなく、真の人間平等の道徳（ヒューマニズムと言ってもよい）相互支持・相互扶助源泉を有つ道徳が、法律や命令に肩代わりするはずである。

このような単位社会の創立は決して不可能ではない。キブツは生きた証拠である。勿論それは一日にしてならぬことローマの比ではないほど困難な事業であろう。平和の手段が平和の結果を約束することからいって、この途を外れては、目的に達することは断じてできない。この英知の獲得と伝播には長い年月を要するし、妨害は必至である。

曲りなりにも、自由を旗印とする自由民主主義は、この事業をいく分なりと容易にさせるかも知れない。一<sup>は</sup>全体主義の重縛に陥ってからそれからの脱出は何倍かの困難が加重するものと覚悟せねばなるまい。

この事業は、革命の如く比較的短日月で決着に至るものではない。永い永い不断の努力・前進だけが、ここに到らしめるのである。親から子へ、子から孫へ、子孫へ、子孫へ、何代かにわたる事業であることを、当初において覚悟すべき底のそれなのである。

## 編 集 を 終 え て

自由連合(元、アナキスト連盟機関紙)紙上の「アナキズム・ユートピア論争」といってよいと思える論争(1964~1965年)があった。これと、秋山三喜雄さんのこれ以外の論説を合わせた冊子を作ろうと思ったのは、共同体熱の盛りのころであった。その時から、長期間経過した。しかしここに、「ユートピア論争」のタイプを打ち終えることができ、あとは、きれいに刷れることを祈るのみである。(どうも見栄えのよいものとなりそうにもないが)心有るひとは、それを承知で読んでいただきたい。また、秋山さんの他の論説の一部(主に月刊キブツ誌上のもの)は、備北文庫の冊子として備北開拓の今井君が作る予定である(もう出しているかもしれない)。そちらもぜひ。(今井真治君の住所は、岡山県岡野郡神郷町油野 備北開拓 である。)

○

僕は、秋山さんの思考に共感を覚える処が多い。秋山さんが述べる理想としてのユートピア社会(自由社会)は、僕がいま頭でえがくものに近いようである。(僕のは運動と言えるようなものではなく、ガキがもつ牧歌的空想像なのであるが...) また、僕はアナキズムもなんとなく気に入っている。あらためて言う必要がないかも知れぬが、階級概念のある、暴力革命を訴えるそれではない、そういった専らえアナキズムがあるとすれば、僕はアナキズムに興味はない。

とは言うものの、僕がユートピアを考えるのは、頭のみで終わっている。(付)として収録した秋山さんの文を読む度に、僕が己の理想と思うものを、本当に理想と思っているのか、と自問してしまう。

高島さんは、社会変革を行う場合、まず自己変革を行う必要があるように述べられている。(60年代後半に流行した「自己否定」に近いことなのだろう。)

都市に埋没することにより(現状に妥協することにより)、僕が僕であるとするなら、僕の頭の中の像は何であるのだろうか。

○

この冊子が、共同体運動に何らかの役にたてば.....と思っている。

1975年4月

山本松男

(大阪市住吉区苅田町10-37)

Anarchim<sub>s</sub>

&

Utopian

Commune